國學院大學学術情報リポジトリ

The Research on Shujo・Ubume・Hashihime

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yamaoka, Toshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000060

醜女・産女・橋姫の考察

山岡敬和

はじめに

かつて日本の夏を彩った怪談――東海道四谷怪談・番町皿屋敷・累が淵。これらの話の主人公お岩・お菊・累。彼女達には共通点があると思われる。特に東海道四谷怪談は、わたしも小学生の時に、中川信夫監督、天知茂主演映画を観て、毒薬のために醜くなったお岩の顔に悲鳴を上げたものだが、その原作である鶴屋南北作『東海道四谷怪談』をみると、お岩は「悪女の顔（＝醜女）」へと変貌した後に亡くなり、夫民谷伊右衛門から不義密通をしたとの濡れ衣を着せられ、小仏小平とともに戸板に打ちつけられ、姿見の川に流されてしまう。このお岩の悲劇は、醜女ゆえに利根川に沈められる累に、また濡れ衣を着せられ殺害された後、井戸に捨てられるお菊の姿にも重なっていくだろう。さらに『東海道四谷怪談』では、蛇山庵室でお岩の呪いに苦しめられる伊右衛門の前に、お岩は「産女（うぶめ）の拵へにて、腰より下は血になりし体にて、子を抱いて現はれ出る」のである。[1]

お岩が見せている、この醜女と産女の姿。その最初には水の神に仕える女性の姿があるのではないかと思われる。そこでこ

の論では、水に沈む醜女、赤ん坊を抱く産女、そしてそこから派生して、さまざまな話柄を展開する橋姫を取り上げて、彼女達の物語が誕生していく過程や、その在り様を考察することとする。

Ⅰ　醜女の誕生

水に沈む醜女として最初に文献に登場してくるのは、『古事記』が語るマトノヒメである。垂仁天皇に対して謀反を企てたサホビコ、その兄とともに稲城に立てこもった后サホビメは、天皇から「汝が堅めたるみづの小佩は、誰か解かむ」と問いかけられて、「旦波比古多々須美智宇斯王の女、名は兄比売・弟比売、茲の二はしらの女王は、浄き公民ぞ。故、使ふべし」と答える。(2)

その提言に従って、「兄比売・弟比売」姉妹が召される次第を、『古事記』は以下のように記す。

后の白しし随に、美知能宇斯王の女等、比婆須比売命、次に、弟比売命、次に、歌凝比売命、次に、円野比売命、拝せて四柱を喚し上げき。然れども、比婆須比売命・弟比売命の二柱を留めて、其の弟王の二柱は、甚凶醜きに因りて、本主に返し送りき。是に、円野比売の慚ぢて言はく、「同じ兄弟の中に、姿醜きを以て還さえし事、隣き里に聞えむは、是甚慚し」と言ひて、山代国の相楽に到りし時に、樹の枝に取り懸りて死なむと欲ひき。故、其地を号けて懸木と謂ひき。今、相楽と云ふ。又、弟国に到りし時に、遂に峻しき淵に堕ちて死にき。故、其地を号けて堕国と謂ひき。今、弟国と云ふ。

ここで、マトノヒメの「本主」とされている「旦波比古多々須美智宇斯王」。その名を「丹波道主命」とする『日本書紀』は、アマテラスとスサノヲの誓約によって誕生する宗像三女神に関しても、

即ち日神の生みたまへる三女神を以ちては、葦原中国の宇佐島に降居さしめたまふ。今し海北の道中に在し、号けて道主貴と曰す。(3)

として、同じ「道主」の名を与えている。したがって、玄界灘を北に延びる海の道に祀られた宗像三女神同様に、「旦波比古

多々須美智宇斯王」も海や水の神に関わりの深い一族であったと考えられる。

その一族の四姉妹の中の末っ子マトノヒメが、醜貌ゆえに「本主」へと返され、それを恥じて、彼女は入水自殺するのであった。

ただし『日本書紀』は姉妹の数を五姉妹とした上で同じ箇所を、

唯し竹野媛のみは、形姿醜きに因りて本土に返しつかはしたまふ。則ち其の返しつかはさえしを羞ぢ、葛野に到り、自ら輿より堕ちて死る。

と、マトノヒメではなくタカノヒメのこととして、入水自殺かどうかも曖昧なままである。タカノヒメが輿から堕ちた「葛野」の地は、後の桂川に当たる葛野川が流れていることを考慮すると、入水した可能性も否定できないだろう。[4] それゆえ四姉妹あるいは五姉妹の一番末の妹が、その醜貌ゆえに入水自殺をしたとして、以下の考察を進めることとする。

では、なぜマトノヒメは「凶醜」と描かれるのだろうか。この点に関して、折口信夫は、「思ふに、悪女の呪ひの此伝へにもあつたのが、落ちたものであらう」として、邇々芸能命に差し出された「甚凶醜き」石長比売と同様の理由を想定している。[5] だが同時に、「水の中で死ぬることのはじめをひらいた丹波道主貴の神女は、水の女であつたからと考へたのである」とし、その入水の理由を彼女が「水の女」であることに求めている。この点に関して『折口信夫事典』も、

信仰的には水界に出自をもつ「水の女」は、やがて本つ国である水界へ去って行くという考えが折口にあったらしい。

と説明している。[6]

折口が想定しているように、「水の女」であるマトノヒメの入水が死ぬための行為ではなく、「本主」のもとへと帰ったことを表すとすると、彼女が入水した場所「乙訓」の地も、単なる地名起源譚としてではなく、水の神との関わりおいて選ばれたことになる。

それを示すのが、『山城国風土記』「可茂社」の記事であろう。[7] 賀茂の建の角身命の娘玉依比売が、石川の瀬見の小川で川遊びをしていた時、上流から丹塗矢が流れて来て妊娠・出産する。その誕生した子が可茂の別雷命であり、父親に当たる「丹塗矢は乙訓の郡の社に坐せる火の雷の命なり」として、乙

訓の地に火雷神としての水の神が祀られていることを伝えている。

同様の例は、『大和物語』一五〇段「猿沢の池」にもみられる。主人公の采女は醜貌と記されているわけではないが、帝が「こととともおぼさ」ない程度の容貌ゆえに寵を得られず、それをはかなんで猿沢の池に身投げする。天皇に召されながらもその容貌ゆえに捨てられ入水するという状況は、そのままマトノヒメと重なっていくだろう。しかも、彼女が入水した猿沢の池は、例えば『興福寺流記』が、

末学云ハク、猿沢ノ池、龍ノ池タル事。（中略）寺ノ南ノ辺ニ龍ノ池有リ。水ノ色滄浪トシテ、波流浩汗（瀚か・私註）タリ。時ニ蓮花生ジ、各々開キ栄ヘ芬馥（ふんぷく）タリ。同宇ノ昔、神龍ノ池ノ故、天下旱魃スレドモ、水半バモ減ゼズ。(8)

と伝えているように、龍神信仰に覆われた池であり、それゆえ興福寺の僧恵印が「その月のその日、この池より龍の昇らんずるなり」という立て札を建てると、それを信じた人々が参集するのであった（『宇治拾遺物語』第130話）。したがって、この采女の入水も水の神のもとへと帰ったみることが可能なのである。

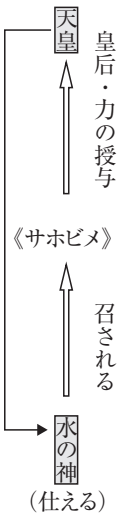
こうして彼女達の入水が自殺でないとすると、自殺の理由とされた醜貌も、人間の短命をもたらした石長比売の場合と同様に、後から付加された理由ということになる。

では醜貌でないとするなら、なぜマトノヒメは「本主」のもとへと帰される必要があったのか。その理由は、サホビメの一連の行動が教えてくれる。

サホビメは兄サホビコから「夫と兄と孰（いづ）れか愛（いつく）しみする」と問われて兄だと答えて、垂仁天皇を殺そうとするものの、「哀しき情」から殺せないままに、一旦は兄を裏切ることになる。しかし最終的には兄とともに焼死することを選んでいる。天皇と兄との板挟みとなって苦しんでいるサホビメ。彼女の置かれている状況は、本来彼女が仕えていた水の神と、新たに仕えることになった天皇との間にあることを、サホビコという同母兄の存在によって示しているのではないだろうか。

この関係を図示すると次のようになる。

【図Ⅰ】



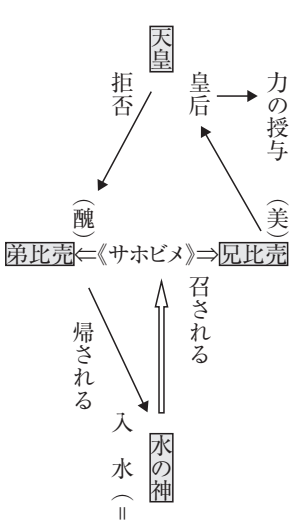
つまり、天皇を新たな神とするために水界から訪れ来る彼女達は、水の神と現人神という二柱の神に仕えることを余儀なくされるのである。そして最終的にサホビメが「愛」と告白した兄とともに心中したように、天皇に神としての力を授与した彼女達は、自らの帰属する水の世界へと帰っていき、その帰っていく姿が入水と表現されたと考えられるのである。

つまり――水の神の力を天皇に授け、再び水の神のもとへと戻る――これが水の神に仕える女性の基本となる姿であり、この姿をもとにして、女一人対男二人の三角関係が成立し、どちらも選択しかねる女が入水をするという物語――生田川伝説や浮舟の物語が発生していったものと考えられる。

そして、この二柱の神に分断されるサホビメの状況を、より明確に表現するために召されたのが、「兄比売・弟比売」だと考えられる。

つまり、本来一人の女性が二柱の神へと分断されている状況を、姉「兄比売」を天皇へ、そして妹「弟比売」を水の神へと配して、新たに表現したのではないだろうか。その結果、美しい「兄比売」は皇后として天皇に仕え、醜い「弟比売」は水の神に仕えるために入水するという、醜女入水の物語が誕生したのであった。それが図Ⅱである。

【図Ⅱ】



だが『記・紀』において実際に召された「兄比売・弟比売」は、

美知能宇斯王の女等、比婆須比売命、次に、弟比売命、次に、歌凝比売命、次に、円野比売命、拝せて四柱を喚し上げき。『記』

丹波の五女の喚して掖庭に納れたまふ。第一を日葉酢媛と曰ひ、第二を渟葉田瓊入媛と曰ひ、第三を真砥野媛と曰ひ、第四を蓟瓊入媛と曰ひ、第五を竹野媛と曰ふ。『紀』

とあるように、基本的な図式が壊れてなぜか四、五姉妹と数が増やされたために、「弟比売＝乙姫」は本来水の世界（＝竜宮）にいるという構造がみえなくなってしまっている。しかし、その誕生段階において乙姫は醜女であったと想定することで狂言に登場する醜女が被る仮面が、「乙御前（乙）」と称される理由も明らかになるだろう。

乙の仮面（『能・狂言図典』より）

Ⅱ　産女の正体

さて、前章に引用した垂仁天皇のサホビメへの問いかけの言葉――「汝が堅めたるみづの小佩は、誰か解かむ」を、一般的には、

男と女が互いに下紐を結びかわし、再会するまで他人には解かせないと約束する風習があった。[9]

といった風に、男女関係や夫婦関係を結ぶ行為と解釈する。それに対して折口信夫は、「水の女」が大嘗祭の神事において、天皇が身に着けた天の羽衣の「小佩」を、

おのれのみ知る結び目をときほぐして、長い物忌みから解放するのである。すなわちこれと同時に神としての自在な資格を得ることになる[10]

と述べて、「水の女」が有する独自の能力としている。

これらの解釈に対して、この垂仁天皇の問いかけを、文字通り、「汝が堅めたるみづの小佩は、堅過ぎて汝以外の、誰か解かむ」と解釈できないだろうか。つまり、サホビメは強い力の持ち主であるために、彼女が力を込めて結んだ「小佩」は、誰も解くことができない、と。換言すると、サホビメは天皇に強力（ごうりき）を授けるものとしてあった、ということである。

それを示しているのが産女の存在である。

産女が文献に表れる初出は、『今昔物語集』巻二七ノ43話であろう。源頼光に仕える武士たちが美濃の渡という場所に産女が出るという話をしている時、頼光四天王の一人である平季武が、自分だったらその場所に行くことができると賭けをして出かけて行き、その様子を見るために何人かが後を付ける。

九月ノ下ツ暗ノ比ナレバ、ツツ暗ナルニ、季武、河ヲザブリ〳〵ト渡ルナリ。既ニ彼方ニ渡リ着キヌ。（中略）暫許有リテ、亦取リテ返シテ渡リ来ナリ。其ノ度聞ケバ、河中ノ程ニテ、女ノ音ニテ、季武ニ現ニ、「此レ抱々ケ」ト云フナリ。亦児ノ音ニテ、「イガ〳〵」ト哭クナリ。其ノ間、生臭キ香、河ヨリ此方マデ薫ジタリ。（中略）

然テ、季武ガ云フナル様、「イデ抱カム。己」ト。然レバ、女、「此レハ、クハ」トテ取ラスナリ。季武、袖ノ上ニ子ヲ受ケ取リテケレバ、亦、女追々フ、「イデ、其ノ子返シ得シメヨ」ト云フナリ。季武、「今ハ返スマジ、己」ト云ヒテ、河ヨリ此方ノ陸ニ打上ガリヌ。[11]

この産女について、『今昔物語集』作者は、狐の仕業か、あるいは「女ノ子産マムトテ死ニタルガ霊ニ成リタル」かと感想を述べている。同様に折口信夫も、

姑獲鳥は、飛行する方面から鳥の様に考へられて来たのであらうが、此をさし物にした三河武士の解釈は、極めて近世風の幽霊に似たものであった。さう言へば、今昔物語の昔から、乳子を抱かせる産女は鳥ではなかつた様だ。幽霊の形を餓鬼から独立させた橋渡しは、餓鬼の一種であつた此怪物がしたのであるが、これは、姿を獲たがって居る子供の魂を預つて居た村境の精霊で、女身と考へられてゐた。[12]

としている。小泉八雲が『梅津忠兵衛』で産神としての産女を描いているように、折口も産女と産神との関連を指摘しながら、[13]結局のところ、怪物や精霊の域を出ることはなかった。

だが産女こそがその名の通り、貴種に神としての力を授け、天皇として誕生させる《産女》の痕跡を留めていると思われるのである。

『今昔物語集』の産女譚では、季武が抱いた赤ん坊は木の葉となるだけで、抱いた意味は見いだせない。それに対して昔話などが伝える産女譚は、子供を抱いてくれと頼まれた男が次第

に重くなるのに耐えて子供を抱き続けると、お礼に産女が望みを叶えてくれるというので、男は強力を手に入れる、という内容である。ただし、産女が男に授与するのは強力に限ったわけではなく、金銭とどちらかを選ばせるパターンもみられる。金銭が登場してくるのは貨幣経済の浸透とともに強力の果たす役割が曖昧になって、より現実的な価値へと移行したものと考えられる。

したがって本来の産女譚は、産女が差し出す子供を抱いた者に強力を授ける話であったと想定され、『今昔物語集』の場合は、すでに勇者であった平季武の胆力を讃える話へと作り変えられたために、強力の授与という肝心な要素が消えてしまい、赤ん坊は落ち葉になるという怪異譚で終わったものと思われる。

では、なぜ産女が水の神に関わる女性といえるのだろうか。その理由として、次の二点を指摘したい。

① 産女が川の中に出現する点

産女の初出例である『今昔物語集』では産女は川の中に出現しているのだが、「ウグメ」と呼ばれる舟幽霊や海で死んだ者の霊に関して、柳田國男が「この赤子を抱いた精霊（しょうりょう）が、浜や渚に現れることが多かった」[14]と説明しているように、産女は水辺に縁の深い存在であったと考えられる。

一方で昔話などでは、産女は便所か墓場に出現している。

便所の場合は、便所の別名である厠の語源の一つが――川のほとりに設けられた小屋――ということと関わって、本来の居場所である川から、より恐怖の対象である便所へと移行したものか、あるいは「出産という異界から此の世への赤子の出現の媒介をなす」[15]厠神の性格と関連し、正月前後の年取り行事などと集合したものだろうか。この問題については明確な答えは出せない。もし産女を水の神に関わる女性とみることが可能なら、イザナミがカグツチを生み亡くなる時に、小便が水の女神である罔象女（みづはのめ）、大便が土の女神である埴山姫になったとする伝承（『日本書紀』第四の書）と関わるのかもしれない。

また墓場については、水の神との関連は見いだせないが、『今昔物語集』作者と同様の――産女は死んだ妊婦の幽霊――という理解から生じた場の設定だと考えられる。

② 男が手に入れた強力が、蛇の力に置き換えられている点

『日本昔話大成』が「産女の礼物」として上げる例話では、男が産女から力を貰った帰り道に、小さな蛇が出て来て男の足の親指を呑み、強い力で引きずっていく。男は蛇を殺し家に帰った後、蛇の力を綱引きによって確かめると、七十五人力で

あったとしている。[16] 産女が授けた強力を直接人間との力比べとしないで、わざわざ蛇の力に置き換え換算するということは、その力は水の世界に関わる力ということを象徴しているのではないだろうか。

さらにこの話の類話として、淵に沈む観音像を取り除いてくれた男茗荷に、礼として千人力を授ける乙姫の話（和歌山県有田郡）もあり、産女と乙姫とが重なっているのである。

以上いささか心もとない根拠ではあるが、産女の正体を《水界の力を男に与える女性》とみて、以下の考察を進めていきたい。

では産女が授ける、蛇に置き換えられていた力とは何であろうか。

この産女同様に、男に強力を授ける存在として知られているのが、『古今著聞集』が伝える高島の大井子の話である。相撲人佐伯氏長に力を授ける大井子が、水の世界に関わる女性であることは、すでに指摘されている。[17] しかも初めて示される彼女の力は、

大井子、夜に隠れて面の広さ六、七尺ばかりなる石の、四方なるを持て来たりて、かの水口に置きて、人の田へ行く水をせきて、我が田へ行くやうに横ざまに置きてければ、水思ふさまにせかれて、田うるほひにけり。[18]

と自らの田へと水をもたらす力、すなわち豊作を招来するために水をコントロールする力として発現している。

この力の発現の仕方は、道場法師が示した、「亦百（またもも）たり余り引きの石を取りて、水門を塞ぎ、寺の田に入る」[19]と同じである（『日本霊異記』上巻第3話）。道場法師は、「金の杖」に堕ちた雷によって農夫に授けられ、頭に蛇を巻きつけて誕生したように、雷神の血と力を受け継いだ存在であり、その力はその孫娘へと継承されている（中巻第4・27話）。その孫娘の力は田の水とは関わりなく発現しているものの、産女の力が娘にだけ伝わり、人が入浴している風呂桶を担ぎ上げたり、五寸釘を抜き差ししたりと語られる娘の逸話に重なっていくだろう。

そして問題となるのが、道場法師の授け親である雷が、人の前に「小子（ちひさご）」として出現している点である。同じ『日本霊異記』第1話に描かれる、少子部の栖軽に捕えられた雷も「小子」とは表現されないものの、同様の姿と考えられる。また、天狗に捕まり比良山の洞窟に閉じ込められた満濃池の龍が、水瓶の水を与えられ甦った時に、

忽ニ小童ノ形ト現ジテ、僧ヲ負ヒテ、洞ヲ蹴破リテ出ヅル間、雷電霹靂シテ、空陰リ雨降ル事甚ダ怪シ（『今昔物語集』二〇巻ノ11話）。

と、童子として現れ大雨を降らしている。つまり、雷や龍といった水の神に関わりの深い存在は、《小さな姿》で人の前に出現しているのである。[20] それが、道場法師の有する力が一家族の中で最も小さな存在である「孫娘」へと受け継がれていく理由であり、産女が抱く子供も同様の存在と考えられるのである。したがって、産女が赤ん坊を男に渡すことで、男は雷や龍といった水の神の力に繋がる強力、すなわち田への水をコントロールする力を手に入れるのであった。

こうして産女を水の世界の女性と捉えることによって、彼女達の果たした役割も明白になるだろう。すなわち彼女達は水の神の有する力、それは稲作の豊穣を招来する力であり、穀物王としての天皇にとって最も必要不可欠な力であったが、その力を天皇に授け、水の世界へと帰っていくのである。そして、天皇はその力を得ることによって現人神となっていくとともに、豪雨や旱魃をもたらす水の神そのものに対抗する力の所有者となるために、二柱の神の間で彼女達は引き裂かれるのであった。

サホビメの場合も、垂仁天皇に皇子ホムチワケを差し出す姿が産女の姿に通じているとともに、彼女が持つ紐小刀が天皇の夢に蛇と現れたように、彼女が固く結んだ小佩（をひも）もまた蛇を象徴しているのかもしれない。その是非はともかくも、サホビメは小佩を力を込めて結ぶことによって、天皇に水の神の力を授けたのであった。

Ⅲ　橋姫の誕生

『日本昔話大成』が産女の話として上げている類話の中に、蛇の崎橋のたもとで赤ん坊を渡す話（秋田県平鹿郡）があるとともに、柳田國男が橋姫の例として上げている国玉（くだま）大橋の女は産女の姿を見せていて、[21] 両者が重なっていることがわかる。それは強力の女、高島の大井子が、石橋のたもとで「川の水を汲みて、身づからいただきて行く女」として登場していることからも窺え、橋姫もまた水の世界の女性の一人といえるのである。

ところで橋姫について考察するとき、最も問題となるのがそ

の多様な話柄である。男を待つ女から鬼女そして人柱まで、一見すると何に繋がりもない話がどれも〝橋姫〟と呼ばれている。だがその基盤に【図Ⅰ・Ⅱ】で示した、水の世界の女性の在り様を据えることで、多様な〝橋姫〟を一つのものとして捉えることが可能となると思われる。

そこで一つずつそれを確認してみよう。

先ずは、宇治の橋姫を詠んだ『古今和歌集』の歌である。[22]

さむしろに衣片敷きこよひもや　我を恋ふらむ宇治の橋姫
（689番歌）

『袖中抄』はこの歌に関して、

宇治の橋姫とは姫大明神とて、宇治の橋の下におはする神を申すにや。其の神のもとへ離宮と申す神、毎夜通ひ給ふとて、其の帰り給ふ時のしるしとて暁ごとに宇治川の浪のおびたたしく立つ音のするぞと申し伝へたる。（中略）隆縁と申し侍りし僧は、住吉の明神の、宇治の橋姫を妻として通ひ給ひし間の歌なりと申しき。[23]

としていて、宇治の橋姫は、離宮と住吉明神という二柱の水の神に仕える姿をみせている。特に離宮が「宇治橋の北におはする」[24]とされている点に、サホビメ・サホビコの場合との類似点、すなわち水の世界の女が二柱の神に仕え、しかも男の一方が同族という点が指摘できるだろう。

さらに、この宇治の橋姫を詠んだ「さむしろに」の歌は、次の二首とも関連があるとされている。

忘らるる身を宇治橋のなか絶えて人もかよはぬ年ぞ経にける
（825番歌）

ちはやぶる宇治の橋守汝をしぞあはれとは思ふ年の経ぬれば
（904番歌）

これらの歌について吉海直人は、「この三首の背景に『待つ女・通わぬ男・年月の経過』という悲恋の輪郭が把握できた」[25]としている。もし、この三首から想定される橋姫を、橋のたもとで長い間男の訪れを待つ女とするなら、『袖中抄』の橋姫とは逆に、男一人対女二人の三角関係が想定されるとともに、橋姫が男に愛されない理由としてマトノヒメ同様の醜貌が思われるのである。[26]

というのも、屋代本『平家物語』剣巻が伝える宇治の橋姫の物語では、「公卿ノ娘」が自分を裏切った男と女を取り殺すために、貴船神社に籠って鬼になりたいと祈願した結果、神の託宣を受けて、

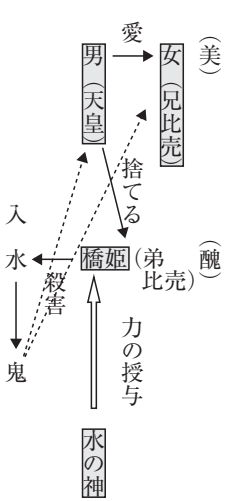
長ヤカナル髪ヲ五ニ分ケテ、松ヤネヲヌリ巻上ゲテ、五ノ角ヲ作リケリ。面ニハ朱ヲサシ、身ニハ丹ヲヌリ、頭ニハ金輪ヲ頂キテ、続松（たいまつ）三把ニ火ヲ付ケテ中ヲ口ニ喰ハヘテ、（中略）カクシテ宇治ノ河瀬ニ行キテ三七日浸リケレバ、貴船大明神ノ御計ヒニテ彼ノ女、生キナガラ鬼ト成リヌ。[27]

と、鬼女としての橋姫の姿を伝えているが、この橋姫が鬼となる理由も、同様にその醜貌にあると思われるからである。

橋姫を鬼と化身させる貴船神社の祭神は高龍（たかおかみ）・闇龍（くらおかみ）とされる水の神であり、その神の託宣のもと水に浸かり続ける姿は、醜貌ゆえに入水する「弟比売」の姿と重なっていく。つまり、前に上げた四角関係の【図Ⅱ】における「弟比売」を橋姫とすることで、「兄比売」と天皇に相当する、男一人対女二人の三角関係が生まれるのである。そしてここに、「鬼　しこめといふ」（『俊頼髄脳』異名）とある、鬼＝醜女という伝承を加えることで、醜貌ゆえに捨てられた女が水の中で鬼に変化（へんげ）し、自分を捨てた男とその相手の女に復讐する、という新たな物語が誕生したと考えられるのである。

それを図示すると次のようになる。

【図Ⅲ】



こうしてさまざまな橋姫の物語が発生する基盤に、【図Ⅱ】で示した水の世界の女性を巡る男女関係を想定することによって、男一人対女二人、男二人対女一人といった組み合わせを変えた三角関係の物語を捉えることが可能となる。しかも、それぞれの物語の内容も人物関係の愛情と憎悪とで、全く違う内容となるのである。

たとえば『袖中抄』が「奥義抄云」として載せる「橋姫の物語」をみると、この物語は、二人の妻を持つ男が本妻の求めに

応じて「七色の」和布を取りに行き、「龍王に取られて失せ」た後、本妻が尋ねて行くと、男が海の中から現れ、「さむしろに」の歌を詠む。それを聞いて今の妻が尋ねて行くと、男が同じ歌を詠んだために、今の妻が襲いかかると消えてしまった、という内容である。

ポイントは男が龍王に捕えられる点だろう。なぜ龍王（＝水の神）が登場しなければならないのか。それは本妻が橋姫と置かれたために、男と水の神とが重ねられて、男一人（＝水の神）と女二人（橋姫ともう一人の女）という三角関係の物語が誕生したのであり、恨んだ今の妻が男に襲いかかるという点は、『平家物語』の橋姫と重なっていくのである。

さらに宇治ではなく長柄の橋の橋姫に関しても、同様の関係を当てはめることが可能である。[28]

この橋姫は架橋のために夫と子供の一家三人で長柄の橋の人柱となるのだが、それは女一人（＝橋姫）に男二人（水の神と夫）の関係であり、女は、荒れる水の神を慰藉するために、夫と選んだ男を人柱に捧げて、自らも幼児を連れた産女の姿で入水するのである。しかし人柱伝説と水の世界の女性との繋がりがみえなくなったために、男の死ぬ理由を説明する手段として、男が自ら人柱になる言葉を口にしたといった、「雉も鳴かずは捕られまじ」式の教訓譚へと変化していったものと考えられる。

同様に水の世界の女性との繋がりがみえなくなっている話に、『今昔物語集』巻二七ノ22話が伝える橋姫の説話がある。[29]

紀遠助という男が勢田の橋を渡る際に女から、「此の箱、方県（かたかた）の郡の唐の郷の段の橋」の女に渡してほしいと頼まれる。美濃に到着した遠助は渡すのを忘れて家に戻ると、妻がその小箱を他の女へのプレゼントと誤解して開けてみると、「人ノ目ヲ捉（くし）リテ数（あまた）入レタリ。亦男ノ閇（まら）ヲ毛少シ付ケツ、多ク切リ」入れられていた。慌てて遠助が段の橋の女に届けるものの、中身をみたことがばれて遠助は亡くなる、という内容である。

この怪談の原（もと）の形を示すのが、昔話「沼神の手紙」である。[30]

東の沼に住む妹が、沼の草を刈る男の殺害を姉に手紙で依頼する。それを読んだ和尚が、金の臼を与える内容へと手紙を書き変える。そのお蔭で長者になった兄を羨んで臼を貰い受けた弟が焦って回すと、臼は沼の底に沈んでしまった、という内容である。

沼の主とされているこの話の姉妹に、水の神の力を男に与える姉と、醜貌ゆえに捨てられ殺意を抱く妹という、水の世界の姉妹の構図を当てはめることは可能であろう。その結果水の神

が登場する代わりに、兄と対立する存在である弟の手に入れた臼が、水の中に沈んでいくのだ、と考えられる。

したがって、遠助の話に登場した二人の橋姫も水の世界に関わる女性達であり、遠助が託された小箱の中の品をお礼の品へと読み換えてくれる存在が妻でしかなかったために、殺意を翻すことができないままに、遠助は殺されたのである。そのため『今昔物語集』作者も「女ノ常ノ習ヒトハ云ヒナガラ、此レヲ聞ク人皆此ノ妻ヲ憎ミケリ」と妻の嫉妬心を責めることになったのである。

遠助に託された小箱の中身が男性器と眼球という、男へと激しい恨みを象徴しているのは、鬼女となる橋姫同様、男に翻弄される立場の水の世界の女性達からの叛乱であろうか。時代とともに女性が強くなって、次々と怪談話を誕生させたのであった。そして、これがさらに形を変えて伝承されていき、お岩・累・お菊の怪談へと繋がっていくのである。

おわりに

以上、垂仁天皇后サホビメと、彼女の代わりに召された姉妹の物語を手がかりにして、水の神に関わる女性達を——水の神の有する強力を天皇に授け、再び水の世界へと帰っていく女性——と想定した上で、そこから誕生した醜女マトノヒメの入水譚、そして、水の神の力を象徴する赤ん坊によって強力を授ける産女譚、さらには水の世界の姉妹を巡る男女関係の中から誕生して、さまざまな展開をみせる橋姫の物語と考察してきた。

一見直接の繋がりがないようにみえる、醜女・産女・橋姫の物語。だが、その根底に水の世界との関わりを据えることによって、全てが一つに繋がったものとして捉えることが可能となったのである。しかもその水底はとても深いので、まだまだ同様の存在を発見できそうであるが……。

註

（1）本文は新潮日本古典集成（1981年8月）により、表記などは私意により適宜改変した。以下に続く、他の引用本文に関しても同様である。
（2）本文は小学館新編日本古典文学全集1（1997年6月）による。
（3）本文は小学館新編日本古典文学全集2（1994年4月）による。
（4）往生を目指して蓮花城達が入水するのも桂川であり（『発心集』巻三）、月に因む再生の川としての桂川の位相があるのかもしれない。
（5）『折口信夫全集』2（中央公論社　1995年3月）所収。
（6）折口名彙解説「水の女」（西村亨編『折口信夫事典』大修館書店　1

988年7月）。
（7）本文は小学館新編日本古典文学全集5（1997年10月）による。
（8）『大日本仏教全書』寺誌部2（1972年8月）所収。
（9）註（2）頭註による。
（10）註（5）と同じ。
（11）本文は小学館新編日本古典文学全集38（2002年2月）による。
（12）「小栗外伝」註（2）と同じ。なお傍線は原文のままである。
（13）「手帳　民間伝承」の中で、「△うぶめ―産神」としている。（『折口信夫全集』35　中央公論社　1998年12月）。
（14）「妖怪談義」（定本『柳田國男集』第四巻　筑摩書房　1968年9月）所収。
（15）飯島吉晴『竈神と厠神』（人文書院　1986年3月）Ⅱの第1章第5節から引用する。
（16）『日本昔話大成』第7巻（角川書店　1979年2月）。また『宇治拾遺物語』177話には、相撲取りの経頼が沼の大蛇と力比べをして破った後、同様に綱引きで蛇の力を確認している。
（17）原田敦子『古代伝承と王朝文学』（和泉書院　1998年7月）第1章第3節を参照した。
（18）第337話。本文は新潮日本古典集成（1981年8月）による。
（19）本文は小学館新編日本古典文学全集10（2002年2月）による。
（20）水界に関わる小童については、石田英一郎『桃太郎の母』（講談社　1966年10月）が詳しく述べている。
（21）「橋姫」（定本『柳田國男集』第五巻　筑摩書房　1978年11月）所収。
（22）本文は小学館新編日本古典文学全集11（1994年11月）による。
（23）本文は『日本歌学大系』別巻二（風間書房　1958年11月）による。
（24）『顯注密勘抄』（『日本歌学大系』別巻五（風間書房　1980年11月）。
（25）「國學院大學大学院紀要――文学研究科――第13輯」（1981年）。
（26）『伽婢子』は「世に伝へて云ふ、橋姫は顔かたちいたりて醜し。この故に終に配偶なし」とする。
（27）本文は『屋代本平家物語』下巻（桜楓社　1973年5月）による。なお、ここで女が真っ赤な身となり、水の中で鬼になるというのは、前に上げた罔象女と埴山姫との関係を思わせる。
（28）『神道集』「橋姫明神事」（『神道大系』文学編一　1988年2月）。
（29）註（11）と同じ。
（30）『日本昔話大成』第6巻（角川書店　1978年11月）。